

【理想を持つつらさ】 第48回

理想を持つとうとするのはつらい。理想を持った瞬間、現実の問題だらけの〈悪い〉ものを感じられる。

「なりたい自分」という理想を持てば、「今の自分」

は不完全なものに思え、自己肯定感が下がる。

教育で「目的」「目標」という理想を持てば、

子どもが何かができない、わからない子ども

に見えてくる。「手はお膝でしつかり座る」

を目標にした瞬間、それができない子どもは

〈悪い子〉に見えてくる。研究で「仮説」と

いう理想を持てば、研究対象が混沌とした不

確定なものだと自覚される。

アドラーは、「ひとりの人間の振舞いはす

べて彼が立てる目標によって確定される」観点から、

精神、あそび、世界像、性格、感情、人間の型、問

題行動（生活上の困難）など、さまざまな概念を検

討し直した。個人心理学の原則を「精神生活のすべ

ての現象は、心に抱く目標のための準備として把握



されるべきである」とした。そして理想は「持つ」
だけでなく、乳児期幼児期から、世界像などで「持
つてしまう」もので、それがその後の理想の持ち方
に影響すると考えた。

キルケゴールは、可能性を持つてしまうことが人

間の根源的な〈不安〉と考え、その不安こ

そが可能性を現実性へ、そして必然性（運

命）の把握にすすめるもので、不安に向き

合い、利用することを提唱した。理想を

持つことから進んで、どうすればその理想

が実現できるか、現実的・必然的にとらえ

るまで不安は消えない。授業目標で言えば、

それが〈現実的に〉達成できる授業展開（カ

リキュラム）が構想できるまで不安は消え

ない。（研究部・加藤聡一）

参考文献

①アドラー（高尾利数訳）『人間の心理学』春秋社、1987年
（原著1927年）、186、106頁。

②キルケゴール（水上英廣・熊沢義言訳）『不安の概念／序文ほか
D』白水社、1978年（原著1844年ほか）、79、80、231頁。